

Ⅵ 町に伝わる文化

1 伝承

坂城町には、昔から語りつがれてきたお話がいくつもありますが、その中でも代表的なものをご紹介します。

(1) 大ねずみと唐猫

大昔、南条村いったいに、ツツガという毒虫がはびこり、寝ている人の上に落ちてきては血を吸い取っていました。血を吸い取られた人はたちまち高熱を出し、7日とたたないうちに大勢死んでしまいました。

村人たちは相談して神様をお願いしたところ、白い大きなネズミが現れました。そして不思議なことに、3日とたたないうちに村中のツツガがいなくなっていました。「あのネズミが、ツツガを食べてくれたにちげえねえ、あのネズミは神ネズミだ。」と、村人たちは喜びました。

そこで神ネズミを今の岩鼻の岩穴に奉って養ったところ、とうとう5尺以上(1.5m)もある大ネズミになってしまい、夜中になると岩穴を抜け出て田畑を荒し回り、牛や馬まで食べるようになりました。

困った村人は、西国から唐(中国)生まれの大ネコを呼び寄せました。唐ネコは岩穴から神ネズミを岩鼻の崖の上に追いつめ、激しい取っ組み合いの末、2ひきとも血だるまになって大湖水(大きな湖)に落ちました。

唐ネコは塩崎(長野市篠ノ井)ではい上がりましたが力尽きて死に、神ネズミはとうとう上がってきませんでした。村人は2ひきとも死んでみれば哀れなので、塩崎に唐ネコを奉り、岩鼻に神ネズミを奉って、それぞれ社を建て、今も供養を続けているそうです。

神ネズミが唐ネコとの戦いのさなか、岩をかみくだいたためにできた流れが「千曲川」になったと伝えられています。



(2) 筭の渡し

時は戦国時代のお話です。坂城町一帯を治めていた村上義清は、何年にもわたって武田信玄と激しい戦いを繰り返していました。しかし、1553(天文22)年4月、ついに居城の葛尾城が落ち、義清は奥方と別れ別れに城を後にしたのでした。奥方は数人の腰元を従えて、着の身着のまま暗い山道を下っていきました。

ようやく里におりた奥方一行の前には、雪解けの水を満々とたたえた千曲川が横たわっていました。とても渡れる流れではありません。しかし、逃げる先の荒砥城はこの川の向こうなのです。

奥方一行は向こう岸^{ぎし}に渡るため、一隻^{いっせき}の渡し船^{ぶね}をようやく見つけました。しかし船頭^{せんどう}は、戦い^{うば}の知らせを聞き、船を奪^{うば}られないように綱^{つな}のしばりを強くしていたのです。

向こう岸まで乗せてほしいと頼^{たの}むと、戦い^{さいちゆう}の最中^{さいちゆう}にもかかわらず、船頭^{せんどう}は奥方一行^{おくはう}を船に寄せ、千曲川^{せんまが}を渡してくれました。奥方は我が身^{わがみ}の危険^{きけん}をかえりみず、船を出^だしてくれた船頭^{せんどう}に心打^{こころ}たれ、お礼^{れい}として髪^{かみ}にさしていた筍^{たけのこ}を手渡^{てわた}しました。

その後、奥方一行^{おくはう}がどうなったかはわかりませんが、村人^{むらびと}たちは奥方^{おくはう}をしのび、この渡し^{わた}を「筍^{たけのこ}の渡し」と呼^よぶようになったということです。



(3) 更科姫^{さらしなひめ}

葛尾城主^{げお}村上義清^{むらかみよしひら}が山狩^{やまがし}りをしての帰り道^{かえりみち}、多くのお供^{おとも}を引きつれて城下^{じょうか}に入^いってくると、一頭^{いっとう}の大牛^{おおいし}が大あばれ^{おほあばれ}にあばれていました。人々^{ひとびと}は逃げまどうばかりで、やがて大牛^{おおいし}は義清^{よしひら}の行列^{ぎやく}の中^{なか}へあばれこみました。お供^{おとも}の者^{もの}がなんとか取り押^とさえようとしてましたが、逆^{さか}に角^{つの}にはねとばされたりひづめにふみにじられたり、行列^{ぎやく}はどっとくずれてしまいました。

やがて大牛^{おおいし}が義清^{よしひら}にとびかかろうとしたまさにその時^{とき}、一人^{ひとり}の少女^{しょうじょ}が牛の頭^{おおいし}にとびつき、両手^{りょうて}で角^{つの}をつかむと左右^{さゆう}にぐらぐらふり、ついには、ねじりたおしてしまいました。この少女^{しょうじょ}こそ、義清^{よしひら}の家来^{けらい}である樂岩寺^{がくがん}右馬之助^{うまのすけ}の娘^{むすめ}「更科姫^{さらしなひめ}」でした。年^{とし}は12歳^{さい}ながら、その大力^{だいき}（すぐれた強い力^{ちから}）とはたらきに義清^{よしひら}は感心^{かんしん}し、更科姫^{さらしなひめ}を城^つに連れ帰^{かえ}りたくさんのほうび^{ほうび}を与^{あた}えました。

この伝承^{でんしょう}には、やさしくて力持ち^{ちからもち}の更科姫^{さらしなひめ}のような女性^{じょせい}へのあこがれと、女の子^{おんなこ}だけでなく男の子^{おとこ}にも求められる、やさしい心^{こころ}と悪^{あく}に負^まけない正義感^{せいぎかん}、そして勇気^{ゆうき}がこめられています。

(4) 甘利さま^{あま}

葛尾靈園^{げお}の真中^{まんなか}に小さなほこらがまつられています。これは「甘利さま」と呼^よばれ、昔^{むかし}から人々^{ひとびと}に親しまれてきました。甘利さまとは、江戸時代^{えど}の末^{すえ}、中之条陣屋^{なかのじょうじんや}の第34代^{だいだい}の代官^{だいかん}、甘利八右衛門^{はちえもん}のことです。

甘利代官^{あま}のころの坂城町^{ひゃくしょう}（当時は坂木^{こま}）には、百姓^{ひゃくしょう}が困^{こま}っている大きな問題^{もんだい}が二つありました。その一つは、坂木^{こま}、中之条^{なかのじょう}、横尾^{よこお}は水田^{みづた}や畑^{はたけ}が少なく貧しい村^{むら}であったこと、もう一つは助郷^{すけごう}とい^いって中山道^{なかせんどう}の途中^{とちゆう}にある岩村田宿^{いわむらだしゆく}（佐久市^{さくし}）や小田井宿^{おたい}（御代田町^{みよた}）へ、人足^{にんそく}を出^だす仕事をしなければならなかったことです。甘利代官^{あま}は、この二つのことを解決^{かいけつ}できれば百姓^{ひゃくしょう}たちがどんなに救^{すく}われるだろうと思^{おも}い、自分の力^{ちから}で何とかしてみようと思^{おも}ったのです。

甘利代官^{あま}はさっそく、中之条^{なかのじょう}の牧^{まき}の内^{うち}一帯^{いちたい}（葛尾組合^{げおくみあい}の靈園^{れいえん}の辺^{あた}り）に広がっていた雑木林^{ぞう}や草原^{そうげん}の開墾^{かいこん}に取りかかり、田^りや畑^{はたけ}などの耕作地^{こうさくち}として百姓^{ひゃくしょう}に与^よっていました。開墾^{かいこん}は横尾^{よこお}や戊久保^{いぬくぼ}にまで及^{およ}び、田んぼ^{たんぼ}が増^ふえることによ^よって必要^{ひつよう}な水^{みづ}を確保^{かくほ}するため、中

之条用水の開発も行いました。百姓たちは働く汗が豊かな収穫となって大変喜びました。

次は助郷です。助郷のお役目に出るのは家族の中でも働き盛りの父親で、多いときには15日間も家をあけることもありました。その間、農業を休まなければならないので、ことに忙しい収穫どきと重なってしまうと泣くにも泣ききれません。

それに助郷に出てもほとんど報酬がありませんでした。甘利代官は、このままではこの百姓は成り立たないと強く感じ、幕府に対しこのことを根気よくお願いしました。とても熱心な甘利代官に、ついに幕府もこの願いを聞き入れて、助郷のお役目が免除されることになったのです。

村人たちは、この二つの問題を解決してくれた甘利代官に深く感謝し、生きながらの神さまとして尊敬しました。そして甘利大明神としてお宮を牧の内に建てたのです。

2 坂城町が生んだ人々

(1) 沓掛仲子 [1749 (延享6) 年～1829 (文政12) 年]

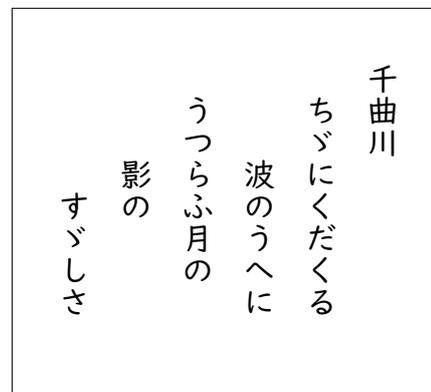
沓掛仲子は、江戸時代の中ごろに、坂城町で和歌や国学（わが国の古典や思想を研究する学問）をさががけて研究した人です。

更級郡今里村（長野市 川中島）の内村家に生まれ、小さいころから国文の教養が深かった祖母の影響を受けて育ちました。16歳で小県郡塩尻村（上田市）の沓掛家に嫁ぎましたが、母の生まれた土地である坂木横町に移り住みました。夫の道秀を助けて酒屋を経営し、また質屋も営みました。1783（天明3）年の凶作のときには、多くの人々の手助けをしました。道秀の死後、四男二女の子どもをかかえながら長男の道寛を励まし、家業をもりたてました。道秀の法要のとき、白衣を着て真っ先に上座にすわったので、親戚のものがそのわけを聞いたところ、仲子は「妻は自分である。主賓は亡き夫なのだから、自分がそのとなりになるのに何の遠慮があるだろうか。」と答え、そこにいた人たちはみなその考え方に感心したといえます。

仲子は生涯作家として努力し、わが国の古典を研究し、歌集・歌論・子女教育論など多くの著書を残しました。



沓掛仲子の歌碑（田町）



歌碑の歌

(2) 稲玉徳兵衛 [1822 (文政5) 年～ 1872 (明治5) 年]

稲玉徳兵衛は、江戸時代の末に坂木村の山野218haを開墾し、坂城の農業を発展させた大恩人です。

坂木は耕地が少なく、千曲川沿いの田畑も洪水のたびに流され、農民は苦しい生活をしていました。徳兵衛は東方山地の大開発を提案し、1853 (嘉永6) 年、農民353人の署名を集め、村と代官所に許可を願い出しました。

開発に反対する一部の農民との争いなど多くの困難を克服して、広大な山野の開発を実現しました。さらに、岩鼻の新道や用水路の普請、村の自治の改善に貢献しました。

1856 (安政3) 年、村人は徳兵衛の働きをたたえ、平沢の開墾地に「昌言社」(神社)を建て、生きながらに神として祀りその恩に感謝しました。

徳兵衛の墓は、心光寺にあり、50歳の若さで亡くなったことがわかります。業績をまとめた「生きながら神と祀られた稲玉徳兵衛翁」には、亡くなる1週間前までの21年間の日記、58冊が残されていると記されています。

2004 (平成16) 年には、徳兵衛の業績を後世に伝えていこうと、町民有志により「稲玉徳兵衛翁頌徳伝承会」が設立され、命日の5月20日前後の休日に「偲ぶ会」を行っています。



稲玉徳兵衛

(3) 川島小助 [1880 (明治13) 年～ 1953 (昭和28) 年]

今も昔も村上は上田と強く結びついていました。国道18号上田・篠ノ井バイパス線ができる前に、県道長野上田線が整備されて上田まで自動車が通れるようになったのは、1933 (昭和8) 年のことです。

この工事は、上五明出身の土木建設業、川島小助によって行われました。それまで村上から上田へ行く道は、すべて徒歩で上半過で崖

を登りトンネルを抜け、岩鼻へと下がり上田へ向かっていました。川島小助は、千曲川の激流がぶつかり渦巻く上半過の急な崖の岩を

うち砕いて平坦な道路をつけるという難工事を成功させました。この工事への人々の願いや経過は、銅板のパネルにして上半過の旧県道わきに記念碑としてはめ込まれていたそうですが、第二次世界大戦中に供出されて今は

ありません。1880 (明治13) 年、川島惣助の子として上五明に生まれた小助は、事業の成功もあって1933 (昭和8) 年、村上小学校へ奉安殿を、上五明の村上神社へは大鳥居を寄付しました。1953 (昭和28) 年、小助は73歳で亡くなりました。



上半過の急崖

(4) 山崎斌 [1892 (明治 25) 年～1972 (昭和 47) 年]

山崎斌は麻績村の白井忠兵衛の三男として生まれました。その後、父の実家である南条村の山崎巖の養子となり山崎家を継ぎました。若いころから文学が好きで、18歳のとき、信州を訪れた若山牧水と親交を結びました。

島崎藤村に師事して小説を学び、1935 (大正 10) 年に『二年間』、翌年『結婚』を発表、12年には評論集『病めるキリスト』を著して作家としての地位を確かなものにしました。藤村からは、第二の国木田独歩と絶賛されたそうです。

一方、戦前から取りかかっていた草木染めに関する研究も進め、戦後『草木染百色鑑』などを完成させました。山崎斌は草木染めの名付け親でもあります。その墓は、耕雲寺の墓地に静かにたたずんでいます。その墓石に彫られた歌は、文人としてひたむきに生きた面影を伝えています。

雪霽の
午後可
ら
雨となり
ルけり
(墓石に彫られた歌)

(5) 宮入行平 [1913 (大正 2) 年～1977 (昭和 52) 年]



作刀に励む行平

宮入行平は1913 (大正 2) 年、坂城の鍛冶屋の家に生まれました (本名は堅一、60歳まで昭平を名のり1973 (昭和 48) 年、行平に改銘)。小さいころから毎日鋸のひびきや鞆の音を聞きながら育ち、小学校を卒業したころから父親について鍛冶の仕事をすることになります。行平の作った農具や刃物は、父親よりうまいといわれるほど好評でしたが、本人はそれらの作品を作ることには興味はなく、刀づくりにひかれていきます。そして「東京に出て刀鍛冶の修業を」という思いを強くしていきます。行平は念願かない24歳で上京し、栗原彦三郎が主宰する日本刀鍛錬伝習所に入門して、刀づくりの修業を始めます。そして一人前の刀鍛冶になろうと一生懸命努力していきます。しかし、戦争が激しさを増し、東京では刀づくりも難しくなったため、32歳の年に郷里の坂城町に戻ります。その後、全生涯をたえまない作刀の研究と鍛刀に情熱を燃やし続け、64歳で亡くなるまで数々の名刀を世に残します。今では、行平の志を受け継いだ多くの弟子たちが「宮入一門」として結集し、研究と鍛刀に情熱を傾けています。

行平は25歳で第三回新作刀展覧会に初入選して以来、数々の賞を授かっています。伊勢神宮、靖国神社など、御神刀謹作 (神様に奉納するための刀をつくること) も数多く、49歳で坂城町名誉町民第一号に選ばれました。そして50歳のとき、国の重要無形文化財日本刀の部、保持者、いわゆる「人間国宝」の認定も受けています。

(6) 児玉勝子 [1906 (明治 39) 年～1996 (平成 8) 年]

児玉勝子は、1906 (明治 39) 年、坂城町込山に生まれました。1922 (大正 11) 年、上田高等女学校 (今の上田染谷丘高等学校) を卒業し、1924 (大正 13) 年、別所温泉で開かれた「婦人参政権獲得運動」(女性も政治に参加する選挙権を与えてほしいと政府に要求した運動) のリーダー市川房枝の講演「婦人運動の将来について」を聞き、女性問題に目覚めました。

1928 (昭和 3) 年、児玉勝子は市川房枝を坂城町に呼んで講演会を開催し、その後市川房枝をしたって上京、婦選 (婦人参政権) 獲得同盟に勤めてさまざまな運動にかかわりました。

戦争末期には郷里の坂城町に疎開しました。戦後 1946 (昭和 21) 年、市川房枝や児玉勝子らの婦選運動が実を結び婦人参政権が与えられ、憲法も改正されて男女平等の新しい日本が誕生しました。

婦人参政権が与えられた後も児玉勝子は、生活が苦しい中、婦人の地位向上のために婦人有権者同盟に参加し、坂城町にもその支部を作って活動しました。請われて坂城小学校 PTA の副会長も務めています。1953 (昭和 28) 年には再び上京し、婦人問題研究所に勤めて市川房枝を助け、戦後の婦人運動を押し進めました。

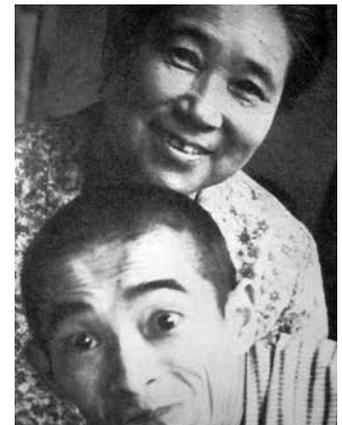
児玉勝子は、わが国の婦人運動に大きな足跡を残して、1996 (平成 8) 年 89 歳で亡くなりましたが、残された資料は長野県立歴史館へ寄贈されました。資料の中の 1925 (大正 14) 年から 1991 (平成 3) 年まで 66 年間書き続けられた 73 冊の日記は、わが国の婦人運動の歴史を知ることのできる貴重な資料です。



児玉勝子

(7) 水野源三 [1937 (昭和 12) 年～1984 (昭和 59) 年]

坂城町に生まれた水野源三は、1946 (昭和 21) 年、坂城小学校 4 年生のとき、赤痢による高熱で小児麻痺にかかり、手足の自由をうばわれ、口さえもきけなくなっていました。しかし、キリスト教の信仰と母うめじらの愛情に支えられて明るく生き、瞬きで五十音を伝えて多くの詩歌を作りました。



母うめじと源三

生きる	私らしく	私は	大きな御手の中で	神様の	雨蛙は雨蛙らしく鳴き	蛍草は	かたつむりは	かたつむりは	大きな御手の中で	神様の	生きる
-----	------	----	----------	-----	------------	-----	--------	--------	----------	-----	-----

瞬きの詩人と言われた源三の詩は、多くの人になぐさめと励ましを与えています。

1995（平成7）年11月、月見区に日本キリスト教団「坂城栄光教会」ができました。ここには、源三の生涯について、いつでも展示しているコーナーがあります。源三はクリスチャンとして、47歳の生涯を閉じますが、その生涯と作品にはクリスチャンであるなしを越えて、人間としての生き方が示されています。時代を超えて受け継がれていくにちがいない、坂城町の宝物です。



水野源蔵の歌碑（田町）

まばたきでつづった詩
 口も手足もきかなくなった私を
 二十八年間も
 世話してくれた
 母
 良い詩をつくれるようにと
 四季の花を
 咲かせてくれた
 母
 まばたきでつづった詩を
 ひとつ残らずノートに
 かいてくれた
 母
 詩を書いてやれないのが
 悲しいと言って
 天国に召されていった
 母
 今も夢の中で
 老眼鏡をかけ
 書きつづけてくれる
 母

(8) 青木固 [1913（大正2）年～1988（昭和63）年]



青木固

1913（大正2）年、坂城町に生まれた青木固は、上田中学（今の上田高等学校）を卒業した後、南満州鉄道に勤めます。その後ハルピンで自動車修理工場を経営しますが、日本が戦争に負けたために財産を全て失い、無一文で帰国することになります。

そのとき偶然、航空機の風防ガラスのプラスチックを目にします。ガラスのように透明だけれど軽くて割れにくい、温めると軟らかくなるが冷えるとまた硬くなる。固は、これまで全く知らなかったプラスチックという材質に興味を持ち、成形加工の仕事を始めます。

その後、天才的ともいえる創造力と、発明開発意欲にあふれた固は、1951（昭和26）年、日精樹脂製作所（現在の日精樹脂工業株式会社）を設立し、1957（昭和32）年効率よくプラスチック製品を造れる射出成形機を開発し販売します。

その後、プラスチック加工メーカーの^{ようぼう}要望に
マッチした、^{やす}効率よく^{せいぞう}安い射出成形機を製造して
いきます。そして30年間にわたってわが国のプ
ラスチック成形加工^{ぎょうかい}業界を支え世界のプラスチッ
ク産業界でも“^{きよせい}巨星”と^よ呼ばれるまでになりまし
た。

固は、1963（昭和38）年に^{しじゅほうしょう}紫綬褒章、1983（昭
和58）年には^{くん}勲三等^{とうざいほうしょう}瑞宝章に^{かがや}輝いたのをはじめと
して、数々の賞を受賞しています。また、1985（昭
和60）年には、坂城町^{いざよう}名誉町民に選ばれています。
それだけ残した^{いざよう}偉業の大きさを^{いざよう}知ることができま
す。



1957（昭和32）年製の射出成形機

3 文学碑

(1) 苧屋原ミニパーク

まつお ばしょう
松尾芭蕉 (1644 ~ 1694)



いさよいも
また更科の
郡かな

こくどう ごうせん せいび
国道18号線の整備により、1989 (平成元) 年、
けんせつ
苧屋原ミニパークが建設されました。

いざよいつか くひ
芭蕉十六夜塚といわれるこの句碑は、芭蕉が更
きこう よく ほ
科紀行で詠んだ句が彫られています。初め横吹
はっちよう
八丁の山道にありましたが、がけくずれのため
ゆくえ ふめい のち はっけん
行方不明となり、後に発見されてここに移され
ました。1774 (安永3) 年に建てられたこの句
ざき きちやうない もつと
碑は、坂城町内の文学碑では最も古いものです。

こばやし いっさ
小林一茶 (1763 ~ 1827)



よこ吹きや
猪首に着なす
蒲頭巾

ほっこく かいどう なんかい かよ
一茶は北国街道を何回も通っていますが、こ
の句は1820 (文政3) 年に詠まれた句で、冬の
こ きび
横吹八丁を越える厳しさを詠んでいます。

たかくわらんこう
高桑蘭更 (1727 ~ 1798)



よこふきや
駒もいなく雪あらし

か が かなざわ はいじん
蘭更は、加賀金沢に生まれた俳人です。句碑
は芭蕉十六夜塚に並んで建てられています。こ
の句は蘭更 しご きやう わ がん
死後、2年目の1801 (享和元) 年坂
もんじん
城の門人によって建てられました。

(2) 大英寺

大英寺の境内には、わが国最初の新劇女優である松井須磨子の句碑が建っています。松代町清野に生まれた須磨子は、御所沢出身の教師、前沢誠助と結婚。誠助の勧めで女優への道を歩みました。

須磨子自筆の句碑は、時代を切り開いた新しい女性須磨子の心意気をよく示しています。

また、須磨子は、女優になる前、姉とともにこの寺に下宿し、近所の女性に裁縫を教えたと伝わっています。

松井須磨子 (1886 ~ 1919)



マントきて
我新しき
女かな

(3) 坂城駅前

若山牧水 (1885 ~ 1928)



春あさき
山のふもとに
畑をうつ
うら若き友と
なにをかたり

若山牧水は1886(明治18)年宮崎県に生まれました。1928(昭和3)年44歳で亡くなるまでに、短い生涯を通じ優れた歌を数多く残しました。

牧水は1912(明治45)年3月16日坂城駅で降り、南条村の山崎斌を訪ねます。そこで青年たちと文学を語り歌を詠みあいました。この歌はそのとき、牧水が詠んだものです。

高浜虚子 (1874 ~ 1954)



春雷や
傘を借りたる
野路の家

高浜虚子は、愛媛県松山市に生まれました。虚子は、1945(昭和20)年4月27日坂城駅で降りて、村上村上平の春祭りを訪れました。この句は、山岸杜子美を上平に訪れた際、夕立にあったときのことを詠んだものです。

(4) 逆木八幡

加舎白雄 (1739 ~ 1791)



霜しもばしら
地より 立ちたる
逆木さかきや

加舎白雄は上田藩の武士で、江戸時代を代表する俳人の一人です。

芭蕉の俳譜を復興することに努め、姨捨の長楽寺に芭蕉面影塚を建てました。戸倉の宮本虎杖やその門下の俳人に大きな影響を与えたと言われています。

(5) 速素盞鳴神社

古事記歌碑



曾能夜幣賀岐袁
爾夜幣賀岐都久流
夜幣賀岐都麻碁微
夜久毛多津伊豆毛
八重垣妻籠み
八雲立つ出雲
その八重垣に
に八重垣造る

入横尾の速素盞鳴神社の境内には『古事記』の須佐之男命の歌碑があります。『古事記』はわが国で最も古い古典で、『古事記』の歌碑は長野県でここにしかありません。

この歌は天照大神の弟である須佐之男命が櫛名田比売と結婚することになり、出雲に新居の宮を造られた喜びの歌です。

いつ誰がこの碑を建てたのかはわかりませんが、江戸時代の末、

坂城は国学が盛んになり、滝沢公庵・沓掛仲子・山本玄慶・橋詰弥惣左衛門など、後の世に名を残す者が多かったのです。入横尾出身の橋詰弥惣左衛門が中心になって、この碑を建てたのではないかとされています。

(6) 会地早雄神社

万葉防人歌碑



ちはやぶる
神の御坂に弊奉り
斎う命は母父がため

南条地区鼠宿にある会地早雄神社境内に万葉防人歌碑があります。

この歌は『万葉集』に収められている防人の歌です。防人とは奈良時代に、東国地方から集められて、九州沿岸を守った兵士のことを言います。

作者は埴科郡の忍男です。防人は無事に務めを果たして帰れるかどうかもわからない役目だったので、信濃の国境の御坂峠の神に幣をささげて父母の安泰を祈ったのです。

4 文化財

(1) 満泉寺の本尊 (県宝)



坂城地区にある満泉寺の前身は、御所沢にあった修善寺で、村上氏歴代の菩提寺でした。1553（天文22）年、村上義清が武田信玄に攻められたときに焼けてしまいましたが、1583（天正11）年、義清の子国清によって村上氏館跡に再建されたのが、今の満泉寺です。

本尊は、修善寺の本尊であった石造釈迦如来坐像で、県宝に指定されています。安山岩でつくられた高さ45.8cmの仏像で、円満な姿と彫り方が特徴です。石像が本尊になっている寺は、県内でもここだけです。

(2) 旧格致学校校舎 (県宝)



中之条地区にある格致学校の建物は、1878（明治11）年に建てられました。

洋風木造建築で、正面入口のアーチ、ガラス入り引き戸などに洋風様式を取り入れ、屋根や漆喰塗の外壁は日本伝統の様式を取り入れています。

全体的に装飾が少なく、質素で落ち着いた明治初期の洋風校舎であるところに、格致学校の特色があると言えます。

佐久の中込学校（明治8年）・松本の開智学校（明治9年）に次ぐ早い時期に、このような新しい校舎を建てた中之条・横尾の人々の教育に寄せた熱い思いを今に伝えています。1976（昭和51）年には、県宝に指定されました。

(3) 十六夜観月殿 (町文化財)

村上地区網掛にある十六夜観月殿は、坂城町全体はもとより、遠く東北信の山々を眺めることができる景勝の地にあり、更級八景*の一つに数えられています。

建物は江戸時代の末に建てられたものですが、村上郷に流された源盛清がここで月を眺めて心を慰めたこと伝えられ月見堂とも呼ばれています。



*更級八景…十六夜観月殿、姨捨山、八幡宮、大雲寺、治田神社、長谷寺、久銘路橋、八幡原古戦場

(4) 耕雲寺の杉並木 (町文化財)



南条地区新地にある耕雲寺は、室町時代から安土桃山時代にかけて横尾に建てられましたが、江戸時代のはじめに今の場所に移されました。

武田信玄・勝頼の厚い保護を受け、名前は信玄がつけたといわれています。杉並木は樹齢300年とも言われ、町の文化財に指定されています。

(5) 自在神社の太々神楽 (町文化財)

村上地区上平の自在山中腹にある自在神社は、平安時代の村上天皇のときに建てられたといわれています。祭神は大己貴命ですが、本殿には村上義光の像と伝えられる木像があります。

神社に伝わる太々神楽は、町の文化財に指定されていて、毎年春祭りに奉納されています。神楽には、榊の舞、鉾の舞、扇の舞、剣の舞、大道の舞、翁の舞、岩戸の舞、撒供の舞の8つがあり、ひとつの物語として構成されています。



(6) 旧坂木宿本陣表門 (町文化財)

坂城地区の立町通りには、江戸時代に坂木宿の本陣を勤めた宮原家の門があります。本陣とは大名の参勤交代の際の宿泊所で、北国街道の制定に伴って置かれたものです。この門は、坂城駅前の近くにあった坂木陣屋(代官所)の建物だったと伝わっています。

宮原家は、1799(寛政11)年に火事で燃えてしまい、脇本陣であった中沢家が本陣を勤めることになりました。1833(天保4)年に宮原家が再建されたため、その後は宮原家と中沢家とが交代で本陣を勤めることになりました。

明治時代になるとこのような宿場の制度は廃止され、その後の歳月の経過によって、本陣の姿を伝えるものは、今では宮原家の門が残されているに過ぎません。

2004(平成16)年には、この門が当時の姿に修復され、町の新たな文化財として指定されました。



(7) 昭和橋



昭和橋は千曲川にかかっている橋で、坂城地区の昭和通りから村上地区の上五明を結んでいます。この橋は鉄筋コンクリートローゼ橋という構造です。ローゼ橋とは橋の横一直線に伸びる桁と半円形のようなアーチが一体として造られている橋のことで、ドイツ人技師のローゼが考え出したものです。

昭和橋は、札幌生まれの中島武技師（1906～1980）が設計し、1937（昭和12）年に坂城側から3連の鉄筋コンクリートのローゼ橋、その先は木の橋としました。何度かこの木の橋の部分が流されたため、1952（昭和27）年には6連が増設されて9連のローゼ橋となりました。1964（昭和39）年には、鋼橋による最後の2連ができ、現在のような橋になりました。2002（平成14）年11月18日には、日本土木学会から土木学会選奨土木遺産として認定されました。